



取締計画調整会議

2000年3月1-3日東京にて

反省点
と意志
疎通の
円滑化の
重要性
を確認

第1回NPAFC取締計画調整会議 (EPCM) が3月、東京で開催され、カナダ、日本、ロシア及び合衆国の代表が集まった。会議は、1999年のNPAFC 年次会議における取締小委員会 (ENFO) で提案・承認されたもので、日本が主催、水産庁 (FAJ) が準備・運営に当たった。

会議は、ENFO議長のヴィンス・オーシェイ大尉と事務局長のヴラジミール・フェデレンコのあいさつで開会し、2000年の取締活動計画や人的資源、公海流し網漁業 (HSDN) 取締の責任を負っている機関の組織構造、HSDNに関する連絡窓口、そして取締活動標準化と改善のために必要な情報といった議題が検討された。これまでの反省点が見直され、意志疎通の円滑化の重要性が強調された。連絡窓口や情報の共有の方

法も確認された。

出席者は世界最大の魚卸売市場である築地を訪ね、マーケティングの専門家から日本のサケ類市場についての分析を聞いた。これによると、天然サケ類から養殖ものへの転換が続いているとのことである。1961年の世界のサケ類生産高は、9割が天然で、養殖ものは1割だったが、日本の2000年の予測では、天然が41%に対して養殖が59%となっている。これは養殖のほうが一貫して質が高く、供給量も価格も安定しているからである。一年を通じて供給量が安定するのは、北半球にも南半球にも供給源があるため。天然のサケ類漁業関係者も、このまま手をこまねいているのではなく、鮮度と見た目の良さを売り込むべきだというのがアナリストの

[次頁に続く](#)

今号の内容

取締計画	1
取締活動	2
プロフィール	3
調査計画	4
ロシアの漁獲予報	6
NPAFCとPICES	7
ペノイヤー所長退職	8
今後の行事	8



取締計画調整会議で出席者にあいさつするENFO議長のヴィンス・オーシェイ大尉。(NPAFC)

違法さけ・ます漁船アークティック・ウィンド号の拿捕

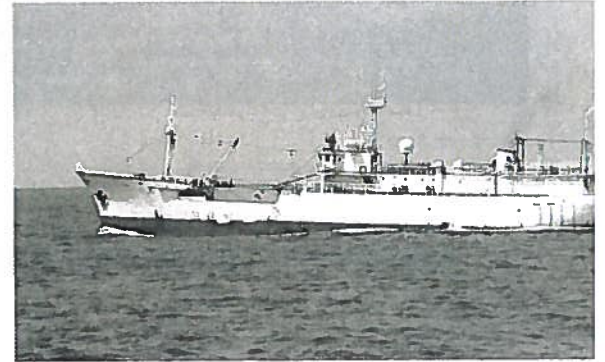
意見である。また、価格の面でも養殖ものと競合できるような価格を目指す必要がある。

出席者はまた、日本でも最大の漁港の一つであり、イワシ、カタクチイワシ、サバ、カツオ、マグロ、サンマの水揚げが多い、銚子も見学した。銚子港では、これまで北海道で水揚げされていたサケ類も扱うことがある。地元の漁業協同組合の幹部から、一帯の漁業と漁協の業務についての概要説明があった。

また、会期中、水産庁とNPAFC主催のレセプションも開かれ、出席者は、打ち解けた雰囲気の中で、意見を交換したり、交流を深めることができた。

5月に流し網漁船のアークティック・ウィンド号が視認され、連携がうまくいつて拿捕に至ったのも、本会議の成果の表れといえる(右の記事参照)。 ■

2000年5月1日、アラスカ州コディアック島を発進した合衆国沿岸警備隊(USCG)のC-130機が、アリューシャン列島の西端アッツ島のおよそ620マイル南で、不審な漁船を視認した。低い雲が垂れ込めていたため、船を識別することはできなかつた



漁船アークティック・ウィンド号(Greg Busch)

が、周囲に7.4キロの流し網と思われるものがあるのがレーダーに写し込まれたので、ベーリング海航行中のUSCGの監視艇シャーマン号が調査に差し向けられた。

5月3日、USCGのC-130が再び漁船を視認、長さ3.76キロから6.27キロの流し網3枚も確認された。識別に役立ちそうなものにはすべてペンキが塗られ、船籍旗も掲げていなかった。

5月7日、監視艇シャーマン号が到着、救命浮き袋と救命ボートの記号から、ホンジュラス船籍の200フィートの公海流し網漁船、アークティック・ウィンド号であることが判明した。漁船は監視艇の無線による呼びかけに応じず、巧妙に追跡を逃れ、逃走した。

5月9日、シャーマン号は、警告と操船不能に陥らせるために発砲する許可を得た。このことをアークティック・ウィンド号に伝え、同船は停止し、USCGの乗組員が乗り込んだ。船上で約1トンのサケ類が発見された。

5月10日、アークティック・ウィンド号はシャーマン号の指示で、放棄した8海里の流し網を回収した。流し網とともに、サケがおよそ700尾、海鳥が64羽、そしてイルカが1頭回収された。

5月11日、ホンジュラス政府の許可のもと、沿岸警備隊がアークティック・ウィンド号を合衆国の法規違反で拿捕した。漁船はアダックまで護送され、船長と乗組員は本国に送還となった。母川を特定するため、漁獲されたサケのサンプルが合衆国海洋漁業局オークベイ研究所に送られ、アークティック・ウィンド号は海洋漁業局によってアラスカ州スアードに移された。

この件については、USCGは終始、NPAFC締約国の取締担当者と密に連携して行動し、3月に東京で開催されたEPCMで作成された取締計画に則ってことを進めた(1ページの記事参照)。フラン・アルマーNPAFC議長が、第17管区USCG本部にて、計画の詳細とアークティック・ウィンド号の件について、概要説明を受けた。 ■

ヴィンセント・オーシェイ大尉

第17管区合衆国沿岸警備隊、計画政策部部长



任期を終えたENFO議長のデニス・ブロックからNPAFCの感謝状を贈られる水産庁次長森本稔。

(NPAFC)

小 委 員 会 議 長 プ ロ フ ィ ー ル

1999年の年次会議にて、2001年の第9回年次会議終了まで任期を務める
NPAFC小委員会の議長を選出

ENFO 議長

ヴィンセント・オーシェイ (合衆国)

1996年以来、ヴィンセント・オーシェイ大尉は、アラスカ州ジュノーに本部を置く、第17管区合衆国沿岸警備隊の計画政策部部長を務めている。USCGには26年以上も在籍し、そのうち10年間は海上勤務で、2隻の艇長として指揮を執ったが、そのうちの

1隻ではベーリング海の巡視に当たった。

現職に就く前は、ワシントンDCの沿岸警備隊本部に勤務、USGCの漁業法取締プログラムを担当し、その間、NPAFC、「中央ベーリング海におけるすけとうだら資源の保存

及び管理に関する条約」(ドーナツホール条約)、それにカナダと中華人民共和国との二国間協定をはじめとする国際漁業協定の交渉において、さまざまな合衆国代表団の一員を務めた。また、ドーナツホール条約の取締作業グループの議長を4年間務め、条約水域内の監視・遵守措置の策定に当たり、最近、ENFO議長に選出された。

オーシェイ大尉は、96年以来、北太平洋漁業管理委員会における地域司令官の指定人として、漁業法取締や安全問題について助言している。

出身はニューヨーク州ロングアイランドで、USCGに入隊するまでは、漁業に従事していた。



ヴィンセント・オーシェイ
(Greg Busch)

CSRS 議長

石田行正 (日本)

石田博士は、清水にある遠洋水産研究所 (NRIFSF) に16年間勤め、現在は、サケ類の沿岸漁業が盛んな釧路にある、北海道区水産研究所の国際海洋資源研究官をしている。

博士は1953年大阪生まれ。少年のころは金魚に熱中、それも魚類生物学者の道へと進んだ理由の一つだったかもしれない。東京水産大学で学士を取得後、東京大学海洋研究所の田中 昌一教授のもとで、修士と博士号論文のため、*Rudarius ercodes* (カワハギの一種) の生活史と個体群変動を研究した。また、学部学生のころに、NRIFSFに行った長澤和也博士と知り合ったが、ふたりで日本のサケ類研究の牽引役の一翼を担ってきた。

石田博士がNRIFSFのさけます管理研究室で働き始めた1982年には、公海流し網漁業は衰退しつつあったが、北太平洋漁業国際委員会のもとで続いていた。博士は、ベーリング海における日本のさけ・ます漁業母船によるシロザケの漁獲を推定するため、主に鱗相分析による系群識別を研究した。

また、NPAFCの会議には、その設立当初の93年からずっと参加しており、ウラジオストックの開会会議での初代CSRS議長レオ・マルゴリス博士の、この歴史的出来事に自分が関与したことについて、孫に語るのを誇らしく思うだろう」という言葉を今でも覚えているという。石田博士は、自身も孫にそのように語ることになるだろうと考えている。■



石田行正 (福若雅章)

調査計画調整会議

調査計画調整会議

2000年3月27-28日、合衆国カリフォルニア州ラ・ホーヤにて、調査計画調整グループ (RPCG) が会合を開き、CSRS議長の石田行正が議長を務め、PICESからパトリシア・リヴィングストンがオブザーバーとして参加した。

サケ類調査航海計画

RPCGは2000年のサケ類調査航海計画を検討したが(一覧表を参照のこと)、国によってはまだ計画段階にあって、政府の承認待ち状態というところもあるので、計画は変更される可能性がある。また、調査航海において、NPAFC締約国間で科学者を相互に交換することも検討した。

小委員会及び作業グループ

科学小委員会がNPAFC科学計画の現状を検討した。新しい科学計画の策定は、締約国のうち三つ(カナダ、日本、ロシア)で、水産研究や漁業管理機関の大大小小的な組織再編が進行中のため、2000年の年次会議まで延期された。

資源評価作業グループでは、(1999年と同様の)2000年のサケ類漁獲統計暫定値に関する文書を作成し、2001年のRPCG会議では統計値を最新化して、同文書を改訂することを決めた。標準化された表形式を使用するので、より良いものとなるはずである。

サケ類標識作業グループでは、2000年の年級群に適用する耳石標識と、重複する標識を避ける方法についての情報を交換した。また、耳石標識を調整するためのスケジュールを立て、温度標識についての情報を交換、NPAFCが提供する耳石温度標識に関するウェブサイトのデータ構造や含めるべき項目についても検討した。

系群識別臨時作業グループでは、シロザケ、ベニザケ及びカラフトマスに関し、それぞれのデータベース毎の基本的個体群一覧を含む遺伝子(アロザイム)データベースの報告書をまとめるため、締約国が協力するよう呼びかけた。また、新しい遺伝子技術の現状、特に北米で進んでいるデータベースの標準化作業について、検討した。最近開発された遺伝子データ分析のための統計手法や、遺伝子以外のデータベースの現状についても、簡単に検討した。■



函館で係留中の調査船、若竹丸。
(野村哲一)

船舶	期間	調査海域	目的	漁具
----	----	------	----	----

カナダ

W. E. リッカー号	N/A	バンクーバー島の西岸からアラスカ南東部	サケ類幼稚魚の海洋分布、回遊成長及び生残	Can Trawl 250 表層ロープトロール
N/A	N/A	ブリティッシュ・コロンビア州南部の水域、ブリティッシュ・コロンビア州及びワシントン州西岸沖		Can Trawl 250 表層ロープトロール

日本

北星丸	6月1-15日 6月21日-7月5日 7月29日-8月12日	北太平洋西部 北太平洋西部 北太平洋西部	魚類群集 魚類群集 魚類群集	刺網集 刺網集 刺網集
おしよろ丸	6月3日-8月19日	北太平洋中部、ベーリング海、アラスカ湾	魚類群集	刺網、延縄、釣り針、トロール網
若竹丸	6月7日-7月23日	北太平洋中部、ベーリング海	資源評価	刺網、延縄
照洋丸	6月13-26日	北太平洋西部	魚類群集	刺網延縄

ロシア

TINRO号	8月-9月初旬	オホーツク海南部、千島列島沖	溯河性サケ類の分布、豊度、生物学的特徴及び物理的環境	表層トロール網
TINRO号	10月下旬-12月初旬	オホーツク海東部、カムチャッカ西部沖	サケ類幼稚魚の分布、豊度及び回遊	表層トロール網
中型トロール船	9月	ベーリング海東部	サケ類幼稚魚、特にカラフトマスの豊度	トロール網
カムチャツキーロソス号	6月-7月	北太平洋、カムチャッカ沖のベーリング海	漁期中の溯河性サケ類資源評価	刺網網

合衆国

グレート・バシフィック号	8月8-19日 8月20日-9月3日	アラスカ湾 ダッチハーバーからブリストル湾にかけて、ベーリング海南東部	サケ類幼稚魚の沿岸回遊、回遊する幼稚魚が使う沿岸水域の物理的環境	Can Trawl 400/580 表層ロープトロール
--------------	-----------------------	--	----------------------------------	--------------------------------

N/A: ニュースレター発行時に未定。

2000年3月のカリフォルニア州ラ・ホーヤでのRPCG会議中、潮だまりを観察するトレイ・ウォーカー、ナンシー・デイ・ヴィスとピーター・ハイゲン。

(浦和茂彦)



ロシア極東の太平洋サケ類 漁業の季節予報

ロシア極東の科学者にとって、漁業の季節予報は新しく開発されたプログラムである。商業取り引きが行われる魚類について報告がまとめられるが、これには重要な漁業情報、地域別、漁具別、そして船舶タイプ別の持続可能最大漁獲量 (MSY) 及び単位努力当たり漁獲量 (CPUE) に関する詳細な予報が含まれ、通常、魚類資源の状態、前の漁期の結果、資源評価の方法、気候及び海洋条件の予報、鮮魚の最良処理方法、市場分析、標準的な漁業規制などが入る。昨年、太平洋漁業科学調査センター (TINROセンター) がカラフトマス漁について、このプログラムを実施し、センターでは情報報告書を5通発行した。報告書は、カラフトマスだけでなく、1999年秋の脂ののったニシン漁、オホーツク海のスケトウダラ漁 (冬及び春)、それに2000年の太平洋におけるサンマ漁についても取りあげている。

TINROの部長で構成される小委員会の決定にもとづいて、『パシフィック・サーモン2000』という漁業予報報告書が作成され、漁業事業経営者、それに漁船の船主や船長に使ってもらうため、1月に発行された。多種多様な情報が掲載されているため、漁業の効率化を進め、漁業規制の違反を減らし、魚類製品の販売を促進するものと思われる。

『パシフィック・サーモン2000』には、種別、漁区別の最終予報がすべて載っている。MSYは予報では、カラフトマスが80%、シロザケが12.4%、ベニザケが4.5%、それにマスノスケ、ギンザケとイワナが約3%の計173,000トンとなっている。2000年の商業漁獲の大部分が、80年代半ば以来の偶数年同様、カムチャッカ西部、サハリン東部、それに千島列島で行われるものと思われる。

サケ類予報に用いる主な指標は、産卵場所における成魚尾数、卵の死亡率、(野生及びふ化場産系群からの) スモルトの逃免数、成魚の回帰係数、海洋のトロール調査によるサケ類稚魚尾数並びに大きさである。漁期の特徴項目には、太平洋サケ類の総計、極東沿岸域別の尾数及びMSY、遡上統計、海域別漁獲努力分布、そして3種類の加工方法別の魚類製品の可能生産量などが含まれ、標準化された形式で表示される。

2000年夏の環境条件は、長期平均に近いものと予想されている。昨年の冬は、季節風が強まったことと平年以上に水面に氷が張ったのが特徴的だった。また、冬から夏の季節風への転換も昨年より10日遅かった。

今年の漁期は6月初旬のカムチャッカ東部におけるマスノスケとベニザケ漁で幕開きした。6月にはサハリン東部とアムール川でカラフトマスの遡上が始まった。7月と8月は、主な漁場すべてでカラフトマス、シロザケ、それにベニザケ遡上の最盛期となる。サハリン、千島列島、それにアムール川では、9月になってもシロザケとカラフトマス漁は続く。

今年については、漁業パラメーターはどれも平均的なものと予想されるが、カムチャッカ西部とサハリン東部については、成魚の回帰数予想が過小評価されている可能性がある。漁業者は、予報より遡上数が多くなることを予期しておいたほうがいい。



産卵中のサケ (Tom Quinn)

ヴラジミール・ラチェンコ
太平洋漁業海洋センター (TINROセンター)

1993年の第1回NPAFC年次会議において、太平洋サケ類の海洋生産の変化に影響する重要な問題について、NPAFCとPICESが共同で研究することが同意されたが、こうした問題は、PICES-GLOBEC「気候変動及び環境収容力」(CCCC) 科学計画で扱われている主要な研究課題だった。以来、NPAFCとPICESは、お互いの会合に代表を送り、おかげでタイムリーに必要な情報交換が促進されてきた。

PICESは、(全米熱帯まぐろ類委員会 [IATTC], 太平洋おひょう国際委員会 [IPHC], まぐろ類及びまぐろ類類似種に関する暫定的科学委員会 [ISC] 並びにNPAFCを含む) 国際漁業機関と共同で、「エルニーニョを越えて」という4日間の会議(カリフォルニア州ラ・ホーヤにて、3月23-26日)を開き、気候の変動性と海洋生態系の影響について検討した。これは、98年にNPAFCとPICESとのあいだの共同研究に関する了解覚え書きに署名してから、初めての本格的な共同イベントとなった。200人の会議参加者は、海洋気候の変動及び重要な研究成果について、学問分野を越えた全体像を得ることができた。

会議中、NPAFC議長のフラン・アルマー、PICES議長のヒュン-タク・ハウ、PICES副議長のヴェラ・アレキサンダー、PICES科学評議会議長のパトリシア・リヴィングストン、NPAFCのCSRS議長の石田行正などの役員が集まり、今後NPAFCとPICESが共同で当たれる可能性のある研究分野について話し合った。パトリシア・リヴィングストンが、1) NPAFCの主導で、サケ類と気候との関係を研究する一連のワークショップを共同で組織する、2) PICESと



「エルニーニョを越えて」の会合共同スポンサー：(左から) グラジミール フェデレンコ (NPAFC), アレキサンダー・ピチコフ (PICES), ヒュン-タク・ハウ (PICES), ロビン・アレン (IATTC), ヴェラ・アレキサンダー (PICES), マイケル・ティルマン (ISC), ウォレン・ウスター 及びポール・レブロンド (運営委員会共同議長), ブルース・リーマン (IPHC)

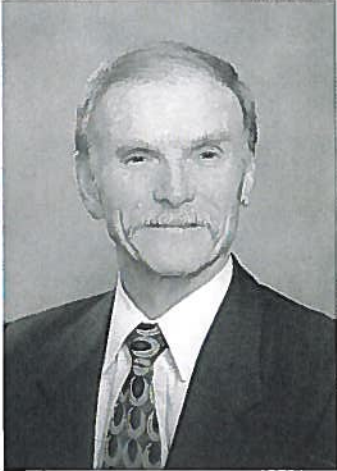
(PICES)

NPAFCを含む他の漁業組織と共同で「北太平洋の生態系に関する現況報告」をまとめるというふたつの新しい可能性を提案した。これは、RPCG (4ページ参照) 会議でNPAFCの科学者によって検討されたが、NPAFCとPICESそれぞれの次回年次会議で本格的に検討されることになっている。

次の共催イベントは、2000年10月29日に東京で開催されるNPAFCワークショップ「サケ類幼稚魚の生産に影響する要因-北太平洋東部と西部におけるサケ類幼魚の生態比較」となっている。気候の変わりやすさと、そういった変動が低次栄養レベルの生産、捕食関係、それにサケ類幼魚の成長と行動にどう影響するのかといったことが重要な案件となる。詳細並びに登録は、NPAFCのウェブサイト<http://www.npafc.org>を参照されたい。■

会議参加者
に海洋気候
の変動及び
重要な研究
成果について
学問分野を越
えた全体像を
提供

スティーヴン・ペノイヤー退職



スティーヴン・ペノイヤー
(David Gelotte)

海洋気象局 (NOAA) の合衆国海洋漁業局アラスカ事務所長を務めていたスティーヴン・ペノイヤーが、5月31日付けで退職した。氏は、1993年の設立以来、NPAFCの合衆国代表代表及び代表団長をずっと務めてきた。それ以前は、21年間、北太平洋漁業国際委員会 (INPFC) の合衆国科学者メンバーであり、89年から93年まではINPFCの合衆国政府委員を務めた。

NOAA海洋漁業局アラスカ事務所長になったのは、1989年1月3日のことだったが、最初から困難に見舞われた。連邦政府の職に就いて2ヶ月、プリンス・ウィリアム・サウンドにおけるエクソン・ヴァルデ

ス号の原油流出事故の電話連絡が入り、原油の除去や回収から、現在も続いている研究や環境保護策に至るまで重要な役割を果たした。

また、海洋漁業局での最初の数年間は、アラスカの底魚漁業を外資系との合弁事業から、完全なアメリカ国内漁業に移行させるという課題とも取り組んだ。ほかにも、世界最大の個別漁獲割当制度、混獲を低減させるプログラム、浪費的な漁業慣行をなくすための漁獲物の保持及び有効利用の促進、オプザバー制度、それに資源評価プログラムなども手がけて、漁業の効率的管理に貢献した。

海洋漁業局事務所長の前は、30年近くアラスカ州政府魚類狩猟局に務め、この間に、アラスカの漁業管理に役立つ、前例がないような経験を積むとともに成果をあげた。

受賞も多い。いくつか挙げると、1996年に商務省銅メダル、92年にはINPFCから傑出した勤務ぶりに対し表彰、90年にアメリカ水産学会の「ウォーレス・H・ノエレンバーグ水産優秀賞」、89年にユーコン川サケ類交渉の合衆国代表団首席交渉官として表彰、そして85年にカナダとの太平洋サケ類条約締結に果たした役割に対し、アラスカ州から表彰を受けている。

ペノイヤーさん、定年生活も、大活躍の現役時代と同じように実り多いものとなるよう一同、心より祈っています。存分に楽しんでください。ほんとうにご苦労さまでした。

2000 今後の行事

サケ類幼魚ワークショップ
海外漁業協力財団、東京
詳細はNPAFCのウェブサイトです。入手可能。
登録は2000年9月15日締め切り。

2000年10月29日

第8回NPAFC年次会議
外務省、東京

2000年10月30日-11月2日

発行者

ケイト・マイヤーズとキャシー・シュワーツ
(ワシントン大学、シアトル) の協力でNPAFC
事務局

NPAFC事務局
Suite 502, 889 West Pender Street
Vancouver, BC, V6C 3B2 CANADA
Tel: (604)775-5550 Fax: (604)775-5577
Website: <http://www.npafc.org>
E-mail: secretariat@npafc.org
ウラジミール・フェデレンコ: vladf@npafc.org
大森浩子: homori@npafc.org
モーリス・和加子: wmorris@npafc.org
デニス・マッグラ: denisem@npafc.org

委員会では、ニュースレター掲載用として、NPAFCの活動に関係する記事、写真、スライドの提供を求めています。

一面の題字写真
北海道大学の調査船、おしよろ丸がアラスカ州ジュノーから出港するところ (Jack Helle)

ISSN 1028-0227

♻️ 再生紙利用

N P A F C 代 表

カナダ

デーヴィッド・ベヴァン
海洋漁業省
ラス・ジョーンズ
コンサルタント
ジェリー・クリスチャンソン
遊漁協会

日本

今村弘二
日本栽培漁業協会
渋谷 實
外務省
弓削志郎
水産庁

ロシア

ウラジミール・イズマイロフ
国家漁業委員会
ウラジミール・バウトフ
ダルリバ

合衆国

ガイ・マックマインド
クィナルト・インディアン部族連合
フラン・アルマー
アラスカ州副知事

今後の行事、出版物、科学論文、サケ類漁獲統計など詳しいことは、NPAFCのウェブサイト <http://www.npafc.org> をご覧下さい。